教職課程センター紀要　第４号　153−162 ページ，2019 年 12 月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.4 153−162, 2019

分析報告

2018 年度卒業生に対する教職課程に関する質問紙調査の分析

Analysis of Questionnaire Survey on Teacher-Training Course for Graduates in FY 2018

児玉佳一・靜 哲人

Keiichi KODAMA, Tetsuhito SHIZUKA

Key words: 卒業生，教員採用試験，教職課程に対する認識，教職セミナー

１．はじめに

2018 年度より教職課程センターでは，教職課程を履修する学生に対して質問紙調査を行い，教職志望度や教職課程に対する意義や不安などを尋ね，その結果を公表している（靜・児玉, 2018）。この取り組みは継続しており，今年度の結果も本号にて示されている（靜・児玉, 2019）。

これらの報告は対象年度の４月に在学している学生を対象とした質問紙調査である。これに加えて本センターでは，当該年度の卒業生を対象とした質問紙調査も行っている。つまり回答者は全員，当該年度に教員免許を取得した学生である。

卒業生への調査では，教職課程を終えて出口に立った学生の教職課程の道のりに対する総括的な認識を捉えることができる。また，４年生４月の調査と異なり，実際に教職免許を取得し４月から教壇に立つ学生，あるいは教職免許を取得したが４月から教壇に立たない学生の双方の認識を捉えることもできる。教職課程のカリキュラムのあり方を，カリキュラムの出口に立った卒業生から捉え直す試みは，在学生への調査と同様に重要である。

本稿では，教職課程を履修し教員免許を取得した 2018 年度の卒業生に対する質問紙調査の分析結果を報告する。そして，この分析結果を基に，教職課程のカリキュラムや支援体制などについて考察する。

２．調査の詳細

2.1 調査の対象

教職免許を取得した2018年度の卒業生333名が回答した（男性 178 名，女性 155 名，過年度生２名を含み，大学院生は含まれていない）。これは当該年度の卒業生 2,563 名の 12.9%になる。ただし，10 名（男性７名，女性３名）が Q2 以降を回答していなかったため，以降の分析から除外した。学科ごとの免許取得者数は表１を参照されたい（なお，表中の学科の順番は当該データの度数が多い順である）。中国語学科では 2018 年度に免許取得者がいなかったため，以下の分析からは除外した。

表１　各学科の免許取得者の人数

学科（%）	全体数（%）	男性数	女性数
教育（28.2）	94（83.9）	45	49
スポ（12.9）	43（41.0）	23	20
書道（12.6）	42（66.7）	9	33
日文（10.2）	34（22.5）	21	13
英語（ 6.9）	23（ 9.6）	13	10
中国（ 6.0）	20（29.9）	10	10
英米（ 6.0）	20（16.4）	14	6
政治（ 4.5）	15（10.0）	12	3
日語（ 3.9）	13（23.6）	8	5
社経（ 2.1）	7（ 3.7）	7	0
現経（ 2.1）	7（ 4.2）	5	2
法律（ 1.2）	4（ 1.8）	3	1
企業（ 1.2）	4（ 2.5）	4	0
環境（ 0.9）	3（ 1.7）	2	1
国文（ 0.6）	2（ 2.2）	2	0
国関（ 0.3）	1（ 0.9）	0	1
経営（ 0.3）	1（ 0.5）	1	0
中語（ 0.0）	0（ 0.0）	0	0
計	333	178	155

注１）学科名の横の％は全免許取得者数に対する比率である。

注２）全体数の横の％は学科卒業生に対する比率である。

2.2 調査の方法

2019年3月の時点で教職課程を履修していた全卒業生を調査対象とし，DB ポータル上で回答を呼びかけた。また，卒業式後に教員免許の受領に来た時点で未回答だった学生にはその場で紙ベースによる回答を依頼した。

2.3 質問項目の作成

質問項目は著者らに加えて，教職課程センターの専担教員である渡辺雅之教授と仲田康一准教授と協力して作成した。

2.4 質問項目

最終的な質問項目は以下の通りである。Q1 から Q5 までは全員に共通した質問項目，Q6 と Q7 は教採不受験者のみが回答し，Q8 と Q9 は教採受験者のみが回答した。

Q1【直近の進路】（共通）**４月からの進路を教えてください。**（１つ選択）
Ａ：教員（学校の）
Ｂ：教員（塾・予備校などの）
Ｃ：教職に関係する大学院
Ｄ：教員以外の教育関係の職・公務員
Ｅ：教育関係ではない職・公務員
Ｆ：その他（→詳細についての自由記述も求めた）

Q2【教員採用試験の受験】（共通）**教員採用試験は受験しましたか？**（１つ選択）
Ａ：公立を受験した
Ｂ：私立を受験した
Ｃ：受験しなかった

Q3【今後教師になる可能性】（共通）**今後，教員になる可能性はどの程度あると思いますか。**（１つ選択）
４：４月から教壇に立つ
３：数年以内になるつもりである
２：いつかはなるつもりである
１：将来的にはなるかも知れない
０：なることはないと思う

Q4【教職セミナーへの参加度】（共通）**教職課程センターの教職セミナーに参加しましたか？**（３～０のうち１つ選択）
３：定期的に参加した
２：時々参加した
１：参加したことはある
０：参加したことはない

Q5【教職セミナーへの要望】（共通）**教職セミナーについて要望・質問があれば書いてください。**（自由記述）

Q6【受験回避の決定時期】（教採不受験者のみ）**受験しないと決めたのはいつですか。**（１つ選択）
０：最初から受けるつもりはなかった
１：２年前期
２：２年後期
３：３年前期
４：３年後期
５：４年の教育実習の前
６：４年の教育実習の後

Q7【受験回避の理由】（教採不受験者のみ）**受験しないと決めた理由は何ですか。**（複数選択可）
Ａ：最初から教員になるつもりはなかった
Ｂ：最初から資格としてだけ考えていた
Ｃ：教員の労働環境に不安を感じた
Ｄ：教員採用試験の難しさについて不安を感じた
Ｅ：自分の性格が教員に向いているかについて不安を感じた
Ｆ：教職以外に自分に向いていること・やりたいことが見つかった

Q8【志望の理由】（教採受験者のみ）**教員免許を取得して教員になろうとした理由として，次はどの程度強いですか。**（５：まさにその通り～０：それは全く違う，の６件法）
Ａ：人にものを教えることが好きだから
Ｂ：人と関わる職業だから
Ｃ：人を育てる教育という営みは重要だから
Ｄ：授業で児童／生徒を教えたいから
Ｅ：児童／生徒の人生に関われるから
Ｆ：顧問として部活動の指導をしたいから
Ｇ：教科の専門性を活かせる職業だから
Ｈ：安定した職業だから
Ｉ：比較的楽な職業だから
Ｊ：親などに免許取得を勧められたか
Ｋ：その他（→詳細についての自由記述も求めた）

Q9【教職課程に関する振り返り】（教採受験者のみ）以

下の各項目について３：強く感じた～０：全く感じなかった，４件法で回答。

Ａ：振り返ってみて，「教科教育法」の授業で，教職の面白さや楽しさを感じましたか？（教科・面白）

Ｂ：振り返ってみて，「教科教育法」の授業で，教職の意義や大切さを感じましたか？（教科・意義）

Ｃ：振り返ってみて，「教科教育法」の授業で，能力面の困難を感じましたか？（教科・能力困難）

Ｄ：振り返ってみて，「教職に関する科目[1)]」の授業で，教職の面白さや楽しさを感じましたか？（教職・面白）

Ｅ：振り返ってみて，「教職に関する科目」の授業で，教職の意義や大切さを感じましたか？（教職・意義）

Ｆ：振り返ってみて，「教職に関する科目」の授業で，能力面の困難を感じましたか？（教職・能力困難）

Ｇ：振り返ってみて，大学の授業以外で，教職の面白さや楽しさを感じましたか？（以外・面白）

Ｈ：振り返ってみて，大学の授業以外で，教職の意義や大切さを感じましたか？（以外・意義）

Ｉ：振り返ってみて，自分の性格が教員に向いているかについて，不安を感じましたか？（性格・不安）

Ｊ：振り返ってみて，免許取得のための単位がとれるかについて，不安を感じましたか？（単位・不安）

Ｋ：振り返ってみて，教員採用試験の難しさについて，不安を感じましたか？（教採・不安）

Ｌ：振り返ってみて，教員の労働環境について，不安を感じましたか？（労働・不安）

Ｍ：振り返ってみて，教職以外に自分に向いていること・やりたいことがあると感じましたか？（別分野・興味）

３．結果

集計・分析結果について，まず，3.1 から 3.8 までは質問項目ごとの回答状況の集計結果を報告する。そして，3.9 からは，特に教職課程センターとして教員採用試験対策講座として取り組んでいる「教職セミナー」に焦点を当てて，セミナー参加者の傾向やセミナーへの要望などを詳細に分析する。

3.1【直近の進路】

卒業直後の進路（Q1）について表２にまとめた。F「その他」と回答した学生には詳細についての自由記述を求めていたが，記述内容からＡ～Ｅのどれかに該当するものはそちらに含めた。学生全体では教職を履修していた卒業生 323 名中 127 名（39.3%）が学校の教員になっている。塾や予備校の教員まで含めると 133 名（41.2%）が教職に就いていることがわかる。さらにD「教員以外の教育関係の職」までを含めると 156 名（48.4%）が教育分野の職に就いている。最右列の数値はA「教員（学校の）」およびB「教員（塾・予備校などの）」の合計数の比率である「教員率」を学科別にまとめた。最も高いのは履修者の 100%が教員になる国際文化学科と経営学科である。ただしこれらの学科は教職履修者の数はそれぞれ２名と１名である。履修者数が５名以上の学科で見ると，教育（75.6%），日語（41.7%），スポ（37.2%），日文（33.3%），中国（31.6%），英語（30.4%）の率が高い。

表２ 学科ごとの４月からの進路（回答人数）

学科	A	B	C	D	E	F	計	教員率
教育	66	2	1	3	15	3	90	75.6%
スポ	16	0	0	1	20	6	43	37.2%
書道	6	0	1	2	25	6	40	15.0%
日文	10	1	0	5	11	6	33	33.3%
英語	6	1	2	2	9	3	23	30.4%
中国	6	0	0	0	7	6	19	31.6%
英米	3	1	1	1	11	3	20	20.0%
政治	2	1	0	1	10	1	15	20.0%
日語	5	0	0	0	7	0	12	41.7%
現経	1	0	0	1	4	1	7	14.3%
社経	1	0	0	0	5	0	6	16.7%
企業	1	0	0	1	1	1	4	25.0%
法律	1	0	0	0	2	1	4	25.0%
環境	0	0	0	1	1	1	3	0.0%
国文	2	0	0	0	0	0	2	100.0%
国関	0	0	0	0	1	0	1	0.0%
経営	1	0	0	0	0	0	1	100.0%
計	127	6	5	18	129	38	323	41.2%

注）Ａ：教員（学校の），Ｂ：教員（塾・予備校などの），Ｃ：教職に関係する大学院，Ｄ：教員以外の教育関係の職・公務員，Ｅ：教育関係ではない職・公務員，Ｆ：その他

3.2【教員採用試験の受験】

教員採用試験受験の状況（Q2）を表３に示す。最右列には公立および私立を合わせた受験率である。全体では教職履修者全体の 48.9%にあたる 158 名が受験したことがわかる。最も受験率が高いのは全員が受験している国文，国関，経営である。いずれも１名ないし２名である

表３　各学科の教採受験状況（回答人数）

学科	公立受験	私立受験	不受験	合計	受験率
教育	63	2	25	90	72.2%
スポ	15	1	27	43	37.2%
書道	15	0	25	40	37.5%
日文	17	0	16	33	51.5%
英語	8	0	15	23	34.8%
中国	9	2	8	19	57.9%
英米	3	0	17	20	15.0%
政治	7	0	8	15	46.7%
日語	5	0	7	12	41.7%
現経	0	1	6	7	14.3%
社経	2	0	4	6	33.3%
企業	2	0	2	4	50.0%
法律	1	0	3	4	25.0%
環境	1	0	2	3	33.3%
国文	2	0	0	2	100.0%
国関	0	1	0	1	100.0%
経営	1	0	0	1	100.0%
計	151	7	165	323	48.9%

表４　各学科の今後教員になる可能性（回答人数）

学科	４	３	２	１	０	２以上	１以上
教育	65	5	3	8	9	81.1%	90.0%
スポ	13	4	3	18	5	46.5%	88.4%
書道	6	3	2	13	16	27.5%	60.0%
日文	9	6	2	4	12	51.5%	63.6%
英語	6	6	2	8	1	60.9%	95.7%
中国	6	2	3	7	1	57.9%	94.7%
英米	2	3	1	11	3	30.0%	85.0%
政治	2	5	3	5	0	66.7%	100.0%
日語	5	0	0	4	3	41.7%	75.0%
現経	1	0	1	5	0	28.6%	100.0%
社経	1	0	1	2	2	33.3%	66.7%
企業	0	1	1	2	0	50.0%	100.0%
法律	1	1	2	0	0	100.0%	100.0%
環境	0	0	0	2	1	0.0%	66.7%
国文	1	1	0	0	0	100.0%	100.0%
国関	0	0	0	1	0	0.0%	100.0%
経営	1	0	0	0	0	100.0%	100.0%
計	119	37	24	90	53	81.1%	90.0%

注）４：４月から教壇に立つ，３：数年以内になるつもりである，２：いつかはなるつもりである，１：将来的にはなるかも知れない，０：なることはないと思う

がこれらの学科は教職履修者が非常に少ない反面，履修者は教員になろうという意志が固いことが見て取れる。履修者が５名以上の学科で受験率が高いのはやはり教育（72.2%）が飛び抜けており，中国（57.9%）日文（51.5%）が５割を超え，政治（46.7%），日語（41.7%），書道（37.5%），スポ（37.2%），英語（34.8%）と続く。

3.3【今後教員になる可能性】

すぐに教員にならないにしても，今後教員になる可能性はどうであろうか。Q3 の回答を表４にまとめた。３が「数年以内にはなるつもりである」２が「いつかはなるつもりである」，１が「将来的にはなるかも知れない」である。右端には２以上の回答をした率と，１以上の回答をした率を示す。

まず全体を見ると，81.1%が２以上の回答をしていることがわかる。すなわち，全学の教職履修者のうち８割以上が「すぐにはならないまでも，いつかはなるつもりだ」と考えている。さらに１以上の回答は実に 90.0%である。つまり「教員になる可能性はまったくない」と考えているのは１割に過ぎず，９割は教員免許を何らかの形で活かしたいと考えていることがわかる。

２以上の回答の率が高かったのは，履修者が５名以上の学科の中では教育（81.1%），政治（66.7%），英語（60.9%），中国（57.9%），日文（51.1%），スポ（46.5%）であった。

3.4【教職セミナーへの参加度】

教職課程センターでは教員採用試験の対策講座として教職セミナーを開講している。教職を目指している学生に対しては，積極的に受講することを勧めているが，実際に教職セミナーにはどの程度の参加者がいたのだろうか。Q4 の結果を表５に学科ごとに示した。ここでは３「定期的に参加した」，２「時々参加した」，１「参加したことはある」，０「参加したことはない」の４段階で尋ねている。全体では，63 名（19.6%）が定期的に参加していた。また，定期的あるいは時々参加していた学生をまとめると 122 名（37.9%）であった。その一方で，147 名（45.7%）が一度も参加していなかった。ただし，一度も参加していない卒業生の中には後述するようにそもそも教職を進路として考えていない学生も含まれる。学科別に見ると，教育（53.3%），中国（47.4%），英語（43.5%），日文（39.4%），スポ（37.2%）が上位を占める。国文も

表５　各学科の教職セミナー参加状況（回答人数）

学科	３	２	１	０	２以上（%）
教育	26	22	12	30	48（53.3）
スポ	12	4	5	22	16（37.2）
書道	3	6	7	23	9（23.1）
日文	6	7	6	14	13（39.4）
英語	2	8	7	6	10（43.5）
中国	6	3	3	7	9（47.4）
英米	1	3	6	10	4（20.0）
政治	3	1	2	9	4（26.7）
日語	2	2	1	7	4（33.3）
現経	1	0	1	5	1（14.3）
社経	0	1	0	5	1（16.7）
企業	0	0	1	3	0（ 0.0）
法律	1	0	0	3	1（25.0）
環境	0	1	0	2	1（33.3）
国文	0	1	0	1	1（50.0）
国関	0	0	1	0	0（ 0.0）
経営	0	0	1	0	0（ 0.0）
計	63	59	53	147	122
%	19.6	18.3	16.5	45.7	37.9

注）３：定期的に参加した，２：時々参加した，１：参加したことはある，０：参加したことはない

表６　各学科の教採を受験しないと決めた時期（教採不受験者のみ）

学科	最初から	２年前期	２年後期	３年前期	３年後期	実習前	実習後
教育	13	1	0	3	4	1	2
スポ	10	2	3	3	2	1	5
書道	10	2	3	4	2	2	2
日文	7	1	1	2	1	2	2
英語	2	0	0	4	4	1	4
中国	4	1	0	2	0	2	2
英米	6	1	3	2	3	2	0
政治	2	1	0	0	3	1	1
日語	4	0	0	0	2	0	1
現経	0	0	0	1	2	1	1
社経	0	0	1	1	1	1	0
企業	2	0	0	0	0	0	0
法律	0	0	0	1	2	0	0
環境	2	0	0	0	0	0	0
国文	0	0	0	0	0	0	0
国関	0	0	0	0	0	0	1
経営	0	0	0	0	0	0	0
計	62	9	11	23	26	14	21
%	37.3	5.4	6.6	13.9	15.7	8.4	12.7

50.0%ではあるが，これは総数２名における１名である点を考慮する必要がある。

3.5【受験回避の決定時期】

それでは教員採用試験を受験しなかった者は，受験しないといつ頃決めたのだろうか。Q6 の分析結果を表６にまとめた。学科別に最も度数の多いセルを網掛けしてある。網掛けが最も多いのは一番左の「最初から受けるつもりはなかった」である。不受験者の 37%の学生が元々教員採用試験は受けないつもりで教職課程の履修を始めたことがわかる。残りの 63%の学生は履修する過程で受験しないと決めたのである。その決断が比較的多いのは３年前期，３年後期，および４年の教育実習の後である。実際に英語，政治などのいくつかの学科では度数の最も多い網掛けセルが「最初から受けるつもりはなかった」ではなく，３年前期，３年後期，実習後あたりにある。教員採用試験を受験する可能性をもって履修を始めた学生が受験しないと決めるひとつの山は３年時，もうひとつは４年時の教育実習の後であるといえそうである。

表７　受験回避の決定時期とその理由の関連（教採不受験者のみ）

理由	最初から	２年前期	２年後期	３年前期	３年後期	実習前	実習後	計
A	15	0	0	0	0	0	0	15
B	29	4	3	6	0	0	2	44
C	6	2	4	7	3	3	8	33
D	6	3	3	6	6	5	1	30
E	8	1	3	4	5	3	7	31
F	16	3	3	4	12	3	6	47

注）A：最初から教員になるつもりはなかった，B：最初から資格としてだけ考えていた，C：教員の労働環境に不安を感じた，D：教員採用試験の難しさについて不安を感じた，E：自分の性格が教員に向いているかについて不安を感じた，F：教職以外に自分に向いていること・やりたいことが見つかった

3.6【受験回避の理由】

次に教員採用試験を受験しないと決めた理由についての設問（Q7）の回答を表７に示す。この設問は，当てはまるものを複数回答できる形式である。ここでは【受験

表８　各学科の教職の志望理由（教採受験者のみ）

学科	A 教える好き	B 人と関わる	C 教育重要性	D 授業教えたい	E 人生に関わる	F 部活動指導	G 専門性活かせる	H 安定職	I 比較的楽な職	J 親の勧め
教育	3.6(1.1)	4.1(1.0)	4.2(0.9)	3.8(1.0)	4.2(1.0)	2.0(1.6)	3.1(1.5)	3.6(1.3)	1.3(1.5)	1.8(1.8)
スポ	4.3(1.3)	4.2(1.2)	4.3(1.3)	4.4(1.3)	4.4(1.3)	3.5(2.0)	4.3(1.3)	4.4(1.0)	0.6(1.2)	1.8(1.8)
書道	3.6(1.4)	3.6(1.1)	3.8(1.2)	3.9(1.1)	3.3(1.6)	3.3(1.2)	4.1(1.0)	3.7(1.3)	0.0(1.3)	2.5(1.9)
日文	3.9(1.3)	4.3(0.8)	4.2(1.2)	4.1(1.2)	4.4(0.7)	2.8(1.7)	3.5(1.4)	2.9(1.6)	0.2(0.6)	1.1(1.5)
英語	4.8(0.5)	4.6(0.7)	4.4(0.5)	4.6(0.7)	4.9(0.3)	3.3(1.8)	3.8(1.6)	3.1(1.4)	0.8(1.6)	0.9(1.7)
中国	4.4(0.7)	4.8(0.5)	4.8(0.5)	4.6(0.7)	4.6(0.5)	4.1(1.0)	4.8(0.5)	4.0(0.8)	0.5(1.4)	0.9(1.5)
英米	4.0(1.0)	4.3(0.6)	4.3(0.6)	4.3(0.6)	4.7(0.6)	3.0(1.0)	3.7(1.2)	3.7(1.2)	1.0(0.0)	1.0(1.0)
政治	4.3(0.5)	4.4(0.8)	4.6(0.5)	4.3(0.8)	4.1(0.9)	3.6(1.7)	3.9(0.7)	2.7(1.0)	0.7(0.8)	0.3(0.8)
日語	3.8(1.3)	3.8(1.8)	4.4(0.9)	4.0(1.0)	4.6(0.9)	3.2(2.2)	3.3(1.7)	3.8(1.1)	1.0(2.2)	1.2(2.2)
現経	5.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	2.0(—)	0.0(—)	0.0(—)	3.0(—)
社経	3.5(2.1)	4.5(0.7)	4.5(0.7)	3.5(2.1)	5.0(0.0)	5.0(0.0)	4.0(1.4)	1.5(2.1)	0.0(0.0)	0.5(0.7)
企業	3.5(0.7)	4.0(0.0)	4.0(0.0)	4.0(0.0)	4.0(0.0)	3.0(1.4)	4.0(0.0)	4.5(0.7)	2.0(0.0)	2.5(0.7)
法律	4.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	4.0(—)	4.0(—)	5.0(—)	0.0(—)	1.0(—)
環境	2.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	—	3.0(—)	1.0(—)	1.0(—)
国文	5.0(0.0)	5.0(0.0)	5.0(0.0)	4.5(0.7)	4.5(0.7)	4.5(0.7)	4.5(0.7)	4.5(0.7)	2.0(2.8)	2.0(2.8)
国関	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
経営	5.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	5.0(—)	4.0(—)	5.0(—)	3.0(—)	0.0(—)	0.0(—)
平均	3.9(1.1)	4.2(1.0)	4.3(1.0)	4.1(1.1)	4.3(1.0)	2.9(1.7)	3.6(1.4)	3.6(1.4)	0.9(1.4)	1.6(1.7)
参考	3.5(1.3)	3.8(1.2)	3.8(1.2)	3.3(1.4)	3.7(1.3)	2.6(1.8)	3.1(1.4)	3.2(1.5)	0.8(1.1)	2.0(1.7)

注１）“参考”は４年生の４月時点の調査（静・児玉, 2018）の結果である。

注２）「—」は回答者がおらずに平均値が算出できなかった，または，回答者が１名であったため標準偏差が算出できなかった部分である。

回避の決定時期】と【受験回避の理由】の回答との関連性を探るためクロス集計を示した。便宜的に項目ごとに20%以上の回答数が得られた時期に網掛けした。

Ａ「最初から教員になるつもりはなかった」という回答は当然すべて「最初から受けるつもりはなかった」という回答と一致している。Ｂ「最初から資格としてだけ考えていた」という回答はＡほどではないが，１年時から３年前期くらいの早い時期に不受験を決めた学生のものである。Ｃ「教員の労働環境に不安を感じた」という回答をしたのは３年前期の他にも４年生の教育実習の後にも目立つ。D「教員採用試験の難しさに不安を感じた」は不受験を決めた時期と関わりなく一定数見られたが，特に受験が近づく３年生以降に多い傾向が見られる。Ｅ「自分の性格が教員に向いているかについて不安を感じた」は最初から受けるつもりはなかった学生と共に４年の教育実習後に不受験を決めた学生に多かった。Ｆ「教職以外に自分に向いていること・やりたいことが見つかった」は，最初から受けるつもりがなかった学生と共に進路選択を迫られる３年後期に決めた学生に多かった。

合計数で最も多いのはＦ「教職意外に自分に向いていること・やりたいことが見つかった」の 47 件（不受験者の 28.4%）と，Ｂ「最初から資格としてだけ考えていた」の 44 件（同 26.7%）である。教職履修者で採用試験を受験しないというケースが必ずしも後ろ向きのものだけではないことが確認できたといえよう。

3.7【志望の理由】

ここからは教員採用試験を受験した学生に，教員を目指す理由（Q8）を尋ねた結果を表８に示す。回答は５「まさにその通り」から０「それは全く違う」の６件法で尋ねた。便宜的に 4.0 以上を網掛けにしてある。また，参考として４年生４月時点での回答結果（静・児玉, 2018）も示した。全員が教員採用試験を受験した集団なので，教職に肯定的な項目の数値が高めであるのは自然である

表９　各学科の教職課程の振り返り（教採受験者のみ）

学科	A 教科 面白	B 教科 意義	C 教科 能力困難	D 教職 面白	E 教職 意義	F 教職 能力困難	G 以外 面白	H 以外 意義	I 性格 不安	J 単位 不安	K 教採 不安	L 労働 不安	M 別分野 興味
教育	2.4(0.6)	2.6(0.5)	2.5(0.6)	2.4(0.7)	2.6(0.6)	2.4(0.6)	2.6(0.5)	2.6(0.6)	2.2(0.8)	1.7(0.9)	2.5(0.6)	2.5(0.6)	2.0(0.7)
スポ	2.3(0.7)	2.8(0.5)	2.6(0.5)	2.5(0.7)	2.7(0.5)	2.5(0.6)	2.6(0.5)	2.7(0.5)	2.1(1.0)	2.1(0.9)	2.7(0.5)	2.4(0.7)	1.9(1.0)
書道	2.2(0.9)	2.5(0.5)	2.5(0.6)	2.2(0.6)	2.4(0.5)	2.5(0.7)	2.5(0.5)	2.5(0.5)	2.4(0.7)	2.4(0.7)	2.5(0.7)	2.5(0.5)	2.1(0.6)
日文	2.7(0.5)	2.9(0.3)	2.5(0.5)	2.5(0.5)	2.8(0.4)	2.5(0.6)	2.7(0.5)	2.7(0.5)	2.1(0.7)	1.6(1.1)	2.7(0.6)	2.2(0.9)	1.8(0.8)
英語	3.0(0.0)	2.9(0.3)	2.7(0.5)	2.3(1.1)	2.4(1.0)	2.0(1.1)	2.5(0.7)	2.8(0.4)	1.7(1.2)	1.7(1.0)	2.8(0.4)	2.6(0.5)	1.7(0.7)
中国	2.6(0.5)	2.8(0.5)	2.6(0.5)	2.6(0.5)	2.6(0.5)	2.5(0.5)	2.6(0.7)	2.8(0.7)	2.4(0.7)	2.1(1.1)	2.9(0.4)	2.4(0.5)	1.8(1.0)
英米	1.3(1.2)	1.7(1.5)	2.7(0.6)	2.3(0.6)	2.7(0.6)	3.0(0.0)	2.7(0.6)	2.7(0.6)	2.3(0.6)	0.7(1.2)	2.7(0.6)	2.7(0.6)	1.7(0.6)
政治	2.4(0.8)	2.9(0.4)	2.4(0.5)	2.9(0.4)	2.7(0.5)	2.6(0.5)	2.9(0.4)	2.6(0.5)	1.9(0.7)	1.4(0.8)	2.9(0.4)	2.0(0.8)	1.7(0.8)
日語	2.2(0.8)	2.0(1.0)	2.2(0.8)	2.0(1.0)	2.2(0.8)	2.2(0.8)	2.8(0.5)	3.0(0.0)	2.6(0.6)	0.8(1.3)	2.8(0.5)	2.8(0.5)	1.0(1.4)
現経	3.0(—)	3.0(—)	2.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	2.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	1.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	1.0(—)
社経	3.0(0.0)	3.0(0.0)	2.5(0.7)	2.0(0.0)	2.5(0.7)	2.5(0.7)	3.0(0.0)	3.0(0.0)	2.0(1.4)	2.0(1.4)	3.0(0.0)	2.5(0.7)	2.5(0.7)
企業	2.0(0.0)	2.0(0.0)	2.5(0.7)	2.0(0.0)	2.0(0.0)	2.0(0.0)	2.5(0.7)	2.0(0.0)	2.0(0.0)	1.5(0.7)	2.5(0.7)	2.0(0.0)	2.0(0.0)
法律	3.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	2.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	2.0(—)	1.0(—)
環境	1.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	2.0(—)	3.0(—)	2.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	3.0(—)	—
国文	2.5(0.7)	2.5(0.7)	3.0(0.0)	2.5(0.7)	2.5(0.7)	3.0(0.0)	3.0(0.0)	3.0(0.0)	2.0(0.0)	1.0(1.4)	3.0 (0.0)	2.0(0.0)	1.5(0.7)
国関	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
経営	3.0(—)	3.0(—)	2.0(—)	2.0(—)	2.0(—)	2.0(—)	2.0(—)	1.0(—)	2.0(—)	2.0(—)	3.0(—)	2.0(—)	1.0(—)
計	2.4(0.7)	2.7(0.6)	2.5(0.6)	2.4(0.7)	2.6(0.6)	2.4(0.7)	2.6(0.5)	2.6(0.5)	2.2(0.8)	1.8(1.0)	2.6(0.6)	2.4(0.7)	1.9(0.8)

注）「—」は回答者がおらずに平均値が算出できなかった，または，回答者が１名であったため標準偏差が算出できなかった部分である。

が，網掛けの比較的少ない，または全くない項目もあることがわかる。まず，Ｉ「比較的楽な職業だから」とＪ「親などに免許取得を勧められたから」はほとんど同意されていない。次に平均値が低いのはＦ「顧問として部活動の指導をしたいから」（M = 2.9）である。しかしこの項目は標準偏差が 1.7 と最も大きく個人によって回答にばらつきがあることが伺える。Ｇ「教科の専門性が活かせるから」とＨ「安定した職業だから」は共に M = 3.6 でそれほど高くはない。これに対して表の左半分のＡ「人と関わる職業だから」，Ｂ「人を育てるという教育という営みは重要だから」，Ｃ「人を育てる教育という営みは重要だから」，Ｄ「授業で児童／生徒を教えたいから」，Ｅ「児童／生徒の人生に関われるから」に対する回答数値はほとんどが M = 4.0 を上回っており，このあたりが教員志望する中核的な理由であると考えてよいだろう。特にこれらの理由は，４年生４月時点（靜・児玉，2018）よりも同意度が強まっている傾向にある。学科別に異なる傾向はそれほど顕著ではないが，書道学科のみ他とやや異なる傾向が認められる。すなわち，他の全ての学科で極めて同意度が高いＢ「児童／生徒の人生に関われるから」は M = 3.3 とそれほど高くはなく（また，ＡからＥについても M = 4.0 を超えておらず），Ｇ「教科の専門性を活かせる職業だから」が M = 4.1 とかなり高い。書道という科目の特性が顕れているといえるかもしれない。

3.8【教職課程に関する振り返り】

教員採用試験受験者による教職課程全体を通した振り返り（Q9）への回答の平均値を表９に示す。便宜的に０～３の４件法で平均値が 2.5 以上のセルを網掛けした。

全体としては「教科教育法」に関する設問Ａ～Ｃ，「教職に関する科目」に関する設問Ｄ～Ｆのいずれにおいても，「面白さや楽しさ」と尋ねた項目の平均値を，「意義や大切さ」を尋ねた項目の平均値がやや上回るという結果になった。「教科教育法」，「教職に関する科目」も面白さもさることながら，より強く意義を感じたということが伺える。その一方で，教科教育法に関して能力的な困難さを感じていた様子も示されている。また，大学の授業以外に関する設問Ｇ，Ｈに対する平均値のいずれも高

表 10　教職セミナー参加度と今後教員になる可能性

		教員になる可能性					
		0	1	2	3	4	計
セミナー参加度	0	41	62	9	11	24	147
	1	4	12	10	8	19	53
	2	6	13	2	10	28	59
	3	2	3	3	8	47	63
	計	53	90	24	37	118	322

い。どのような体験によってそう感じたかを今後探っていく必要があるであろう。自分の性格に関するＩや別分野の興味に関するＭの数値は軒並み低いのは回答者が教員採用試験の受験者であることと整合性がある。しかしＫとＬの数値を見ると，採用試験の受験者ではあっても採用試験の難しさについては強い不安があり，かつ教員の労働環境についての不安もあることがわかる。

学科別では英米文学科のＡとＢに対する回答平均値の低さが目立つ。同項目に対する英語学科の回答平均値の高さと対照的である。

3.9 教職セミナー参加度と教員可能性の関係

ここからは，教員採用試験対策として実施している教職セミナーと卒業生の認識の関連について詳細な分析を行う。

まず，教職セミナーの参加度と今後教員になる可能性には関係があるだろうか。表 10 にクロス表を示す。行に教職セミナーの参加度（０：参加したことはない～３：定期的に参加した）を，列に教員になる可能性（０：なることはないと思う～４：４月から教壇に立つ）をとっている。

全体の傾向としては教職セミナーの参加度と教員になる可能性に有意な関連が認められる（χ^2 = 108.962，p <.0001，Cramer' s V = .330）。定期的に参加していた 63 名のうち 74.6%にあたる 47 名が４月から教壇に立つ一方，教員になる可能性はないと思うと回答した 53 名のうち 77.4%にあたる 41 名は教職セミナーに参加したことがない。その反面，４月から教員になる学生の中でも一度もセミナーに参加したことがないケースも 24 名いたことがわかる。この 24 名の内訳を確認すると，学科別では教育学科が最も多く 14 名だった。日文１名，書道３名，現経１名，日語２名，国文１名，スポ２名だったことからも教育学科での不参加が目立つ。また，教育学科 14 名の内，６名が幼稚園教員志望者であったことも特徴的である。

表 11　教職セミナーへの要望・質問

	コメント
1	教職セミナーの先生方が何曜日の何時までいらっしゃるかが分かりにくいことがあります。（日文・参加度２）
2	そのままでいて下さい（教育・参加度２）
3	面接練習とかがつがつ入れないと入れないのが嫌だった（教育・参加度３）
4	幼稚園の試験対策もやってほしい（教育・参加度２）
5	本当にセミナーのおかげさまです。（教育・参加度３）
6	個人的には，教職セミナーのような授業（学問的な知識をつけながら，英語を読んでいき，時に愛のムチを入れられつつ教壇に立って解説するスタイル）は卒業してからでも受けたい授業の一つです。（英語・参加度３）
7	行きづらい（スポ・参加度１）
8	非常にためになりました。（スポ・参加度３）

また，24 名の受験状況で見ると，６名が教採不受験であった。おそらく，教師になることは考えていなかったが，他職種への就職が叶わなかったため，講師として教壇に立つ選択をしたのだと考えられる。

補足的に，教職セミナーに一度も参加していないが教員採用試験を受験した卒業生は 33 名であった(その内の 18 名が前述の教員になる可能性が高い卒業生と合致する)。また，教職セミナーに定期的に参加していたが教員採用試験を受験しなかった卒業生は８名だった。この８名の内２名は４月からの進路先を学校教員としている。おそらく講師として教壇に立つのだろう。残りの６名は非教育職（その他含む）を進路先に選んでいる。具体的な進路先として自由記述されたものには,「心理系大学院」などの教育と近しくなりそうな進路先もあったが，非教育職を「自分に合ってる」として選んだ記述も見られた。

3.11 教職セミナーへの要望

最後に，教職セミナーについて要望・質問を自由記述する項目（Q5）には全学科で 10 件の記入があった（表 11)。そのうち「特になし」,「なし」（いずれも参加度０の学生）を除いた８件を回答者の所属学科と教職セミナー参加度とともに表に示す。

これらの記述を大別すると，セミナーへの感謝（回答番号５，８）や指導への高評価（２，６）の一方で，開講日時の不明瞭さ（１），指導内容への不満（３，４），行きづらさ（７）も挙げられた。開催日時の不明瞭さについては，在学生アンケートの分析結果（静・児玉, 2019）

でも指摘されている。また，幼稚園の試験対策への要望を見ると，前述の教育学科（特に幼稚園希望者）が教職セミナーに参加していない現状と整合性がある。回答番号７の「行きづらさ」は何に対しての行きづらさなのかまでは不明であるが，在学生アンケートの結果（静・児玉, 2019）から類推すれば，既に完成された学生コミュニティに新参者として参加することへの抵抗感が考えられる。

４．まとめと考察

2018 年度の卒業生（免許取得学生）に対する調査結果を整理すると，以下の通りである。

（１）免許取得者の直近の進路は，約４割が学校教員である。また，約５割が教員（塾や予備校含む）以外の職も含めて，教育関係の職業に就いている。

（２）教員採用試験の受験状況は，約５割が受験しており，そのほとんどが公立校の教員採用試験を受験している。

（３）今後教員になる可能性は，約８割が「すぐはならないまでも，いつかはなるつもり」だと考えている。そして９割が今後教員になる可能性を念頭に置いており，教員免許を何らかの形で活用したいと考えている。

（４）教職セミナーへの参加度は，約２割（63 名）が定期的に参加していた。この 63 名の内 74.6%にあたる 47 名が４月から教壇に立つ一方，教員になる可能性はないと思うと回答した 53 名のうち 77.4%にあたる 41 名は教職セミナーに参加したことがなかった。

（５）教職セミナーへの要望は，開催日時の明確化，参加しやすい環境や雰囲気, 幼稚園教員対策が挙げられた。

（６）教員採用試験を受験しなかった学生の受験を回避すると決めた時期は，約４割が元々受験する気がなかったとし，それ以外は３年前期，３年後期，そして教育実習後に決めているようであった。

（７）受験を回避する理由としては，３年生の時期には教員の労働環境への不安や教員採用試験の難しさを感じていることが挙げられた。また，教育実習後に改めて労働環境への不安を感じたり，自分の性格が教員向きではないことへの不安を感じたりして受験を回避するようであった。それ以外にも「教職以外にやりたいことが見つかった」のような前向きな回避理由も挙げられた。

（８）教員採用試験を受験した学生の教職志望理由は，「人と関わる職業だから」,「教育は重要だと考えるから」,「児童／生徒の人生に関われるから」といった教育の本質に関わる理由が強い。そして，こうした理由は４年生４月時点よりも強まる傾向にある。

（９）教員採用試験受験者における教職課程全体に関する振り返りでは，「教科教育法」や「教職に関する科目」で教職の意義や大切さを感じていることが示された。また，大学の授業以外の場でも教職の面白さや意義を感じているようである。その一方で,「教科教育法」で能力的な困難を感じていたり，教員採用試験に対する不安を感じていたりする様子も示されている。

卒業生への調査では，在学生への調査とは異なり，４年間の総括的な様子が読み取れる。約５割が教育関係職に就くという現状から考えると，本学の教職課程は教育職全般に対する肯定的な態度形成に一定の成果を示しているといえる。また，約４割が卒業後すぐに教員になる一方で，その他約５割も今後教職の道も候補に考えたいとしている。昨今，教職の労働状況などの不安点をマスメディアや SNS を通して耳にすることが多い。本学の卒業生にもこうした労働環境に不安を感じている学生は多いが，それでも教職を今後の可能性として残している点は特筆すべき特徴であるといえる。

教員採用試験を受験しなかった学生は，最初から教員になるつもりのなかった学生を除いて，約５割が３年生以降に教員採用試験の不受験を決めている。その理由には，教員以外の自分のやりたい仕事が見つかったという前向きなものもあるが，教員の労働環境や教員採用試験の難しさなどの理由も挙げられている。教員を目指す４年間は様々な不安と期待を抱えており（e.g., 姫野, 2013; 久保, 2012），特に不安面は本学の学生だけの特徴ではない。教員の労働環境は一朝一夕で変わるものではなく，また，教員採用試験も合格するためには日々の地道な努力を積み重ねる他ない。それでも，労働環境との向き合い方，教員採用試験との向き合い方を考える場として教職課程が機能することが，後ろ向きに教職を諦めてしまう学生へのサポートとして求められていると思われる。本学では，教職セミナーや教員養成コロキアムといった取り組みが上記の点に関連してくるだろう。

例えば, 教員養成コロキアムの中でも毎年 11 月に開催しているキャリア支援イベントでは，教員として働いている本学卒業生や，教員採用試験を受験した４年生とのトークセッションを設けている。そこでは，部会にもよるが，教員としての魅力だけでなく，教員としての働き方も含めたライフワークバランスなどもトークテーマとなっている。先輩教員がどのように労働環境と付き合っているかという話を聞くことが学生にとって労働環境との向き合い方を考える上で一助となるようにさらに取り

組みを進めたい。

また，教職セミナーは教員採用試験対策を主な取り組みとしつつ，教員採用試験に向けた学習の仕方についての相談も各担当教員の裁量で行われている。教職セミナーは教員採用試験に向けた学習のペースメーカーとなる他にも，同じ目標に向かう学生同士の関係性構築などの機能も有している。教員採用，あるいは教員として働くことの困難はもちろんあるが，こうした困難さと向き合い続けられる態度も教職セミナーを通して培われるよう取り組みを進めたい。関連して児玉（2019）は，教員採用試験に対する認識を測定する尺度を作成し，教員採用試験に対する認識と学習動機づけや教職に向けた学習行動との関連を検討している。主な結果として，教員採用試験に対して「自分が教師として成長するためにある」と認識している学生は，教職関係の講義に対して獲得価値の動機づけ（学習内容を理解・獲得することが望ましいと価値を置き,その価値に学習が動機づけられている）が高く，また，大学の講義以外でも教職に向けた学習行動を取っている傾向にあることが示されている。これらの結果から，教員採用試験を制度的な義務として設けられているものや，自分の力量を測られるものとして認識する以外にも，教員採用試験を通して教師としての成長につなげるという認識を持つことができるように促すことも重要であるだろう。

教職セミナーについては，具体的な要望（開講時間の周知）の他にも，幼稚園教員対策が実施されていないなどの実施内容の不明瞭さ（伝達の不十分さ）が，参加を抑制している可能性も示唆された。本学の教職セミナーは，小学校教員の対策はもちろんのこと，幼稚園教員の対策も適宜対応しており，また，理系教科の対策についても行っている。こうした情報が学生たちに十分に周知できるように宣伝を考える必要がある。

最後に本調査の限界点および今後の展望を述べる。

第一に，上記に挙げた本学の取り組みについて，卒業生がどういう認識であるかを，より詳しく調査することが必要である。例えば教職セミナーについても，全体的な要望だけでなく，セミナーのどういう取り組みが良かったか(あるいはどういう取り組みに改善を求めたいか)などについても検討したい。また，授業以外での経験でも意義や面白さを感じていたが，具体的にはどういう経験なのかといった点も検討の余地がある。

第二に，これは直近の展望ではないが，卒業時だけのアンケートではなく，卒業後１年，卒業後５年などの継続的な卒業生調査も重要であると考える。教員養成教育の質保証体制の構築が謳われる中，卒業生に対する調査はまさにこれらに関連してくると思われる。また，卒業後も教員として働く学生のサポートやケアという意味でも,大学としてのつながりを持ち続けられるような整備,配慮を考えられればと思う。

註

１）本学における「教職に関する科目」には，教師論，教育学概論，教育心理学概論，生徒指導論，教育課程論，教育方法論，道徳教育論，特別活動論，教育相談が該当する。学生にはこれらの科目名も提示した。

謝辞

本調査の実施・実務にあたってくださった教職課程センター事務職員の方々，そして回答してくださった全ての学生の皆さまに深く御礼申し上げます。

引用文献

姫野完治 (2013).　学び続ける教師の養成―成長観の変容とライフヒストリー　大阪大学出版会

児玉佳一 (2019). 教員採用試験認識尺度の開発 大東文化大学教職課程センター紀要, *4*, 5–15.

久保順也 (2012). 初等教育教員養成課程における学生の教職意識の形成プロセスに関する縦断研究（４）宮城教育大学紀要, *47*, 295–305.

靜 哲人・児玉佳一 (2018). 2018 年度質問紙回答からみる本学学生の教職志望度の強さ 大東文化大学教職課程センター紀要, *3*, 79–90.

靜 哲人・児玉佳一 (2019). 2019 年度質問紙回答からみる本学学生の教職志望度の概要 大東文化大学教職課程センター紀要, *4*, 163–173.